

聖霊シリーズ 1コリント 12章 8節「知恵の言葉」

1A 知恵と知識の違い

2A 適切な、時にかなった言葉

3A 聖書の事例

4A 今日の知恵の言葉

本文

私たちの聖霊シリーズは、個々の賜物の学びに入ります。コリント第一 12章を前回、見ました。御霊の賜物について、知らないでいてほしくない、という言葉からパウロは始めます。そして、まだ異教徒であった時はものの言わない神々のところに連れて行かれた、と言っています。つまり、私たちが御霊に導かれると、主が語ってくださるのだよ、ということです。そして、御霊によれば必ず、「イエスは主」という告白が来るよ、反対に「イエスは呪われよ」という噂があるけれども、それは違う、とパウロは否定しました。イエスが主であること、イエス・キリストが私たちの栄光となり、この方に服することが、御霊の賜物の前提になります。

それからパウロがこの章で強調していること、「それぞれ異なる賜物がある」という話に入ります。キリストの体は、「多様性にある一致」です。賜物はいろいろあるけれども、御霊は同じだ。奉仕はいろいろあっても、主は同じ主だ。そして働きもいろいろあるが、神は同じ神である。そのような多様性のある聖霊の働きを私たちは見ます。もう一つ大切なことをパウロは言いました。7節に、「**みな**の益となるために」、御霊の賜物の現れがあるということです。「自分がどのような賜物があるのかな？」という、自分の能力発見のような求め方ではいけません。「御霊が教会に何を語られているのか？」という見方です。みな**の**益になることを願うので、人々に仕えるのでなければ賜物は与えられません。

そして、その現われとして、パウロは 8節から 10節までに九つの賜物を列挙しています。私たちが学ぶのは、一つ目、「知識の言葉」です。「8節 **ある人**には御霊によって知恵のことばが与えられ」とあります。

1A 知恵と知識の違い

この「知恵」という意味をじっくり考えてみたいと思います。私は、聖書に語られている「知恵」について調べるのに、また知恵の言葉を求めるのにわくわくしています。今、個人的なデボーションは箴言を呼んでいるのですが、知恵というものが単なる処世術では全くなく、神を恐れるところの神との関係そのもの、あるいはキリストご自身ということが言えます。

「知恵のことば」の次に、「知識のことば」が列挙されていますね。つまり、知恵と知識が区別され

ています。その意味合いの違いをしっかりと知る必要があります。知識というのは、事実や情報をためていくことですね。これは大事です。けれども、知恵はその事実や情報をどのように生かしていくのか、適用させていくのか、何をすればよいのかを教えるものです。知恵があるという、あたかも知識や経験がたくさんあるから、知恵があると私たちは勘違いします。そして、「これだけ、聖書の知識のある人が、どうしてこうなっているの？」という疑問を持つことがあるかもしれません。聖書の知識はあっても、それを適切に適用する知恵がないのです。

例えば、知識に拠れば、ある一定量以上のお酒を飲めば、酔いが回るということを教えます。そして車の運転は、思考がはっきりしていて、初めて運転できることを教えます。けれども、知恵に拠れば、「お酒を飲んだ後は車の運転をするな」となります。知識はあっても、それを適切に運用しなければ意味がないのですが、それをしてくれるのが知恵です。

この違いが分かると、私たちは知っていなければいけないはずの人が、まるで知らないような行動を取る、その不思議を理解することができます。知識があるからといって正しい行動を取ること保証しません、知恵が人を正しくします。ですから、知識において賢い人が、最も愚かなことをすることは多々あるのです。「ローマ 1:21-23 というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、不滅の神の御栄えを、滅ぶべき人間や、鳥、獣、はうもののかたちに似た物と代えてしまいました。」

私たちの知っているテロリストは、高学歴の人たちが多くを知っています。オウム真理教の地下鉄サリン事件を引き起こした実行犯は、知識はたくさんありましたが知恵がありませんでした。私たちはそのような罪を犯した人々を見下すことはできますが、実際に会ったらとても聡明で、純粋な人たちなんだと思います。けれども、そのような愚かな行為に走って行ってしまった。

なぜなら知恵というのは、繰り返しますが、情報の蓄積ではなく関係によって与えられます。自分を造られた方を恐れるという、その関係の中に確かに生きていくべき知恵があります。「主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟りである。(箴言 9:10)」とあるとおりです。主を恐れる、あるいは主を主として生きていく、その敬いの生活そのものが知恵であると言えましょう。使徒パウロはこう言いました。「2テサロニケ 2:10-11 また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからです。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。」何が真理で偽りであるか、それを知的に探ることも大事ですが、それ以上に真実な生き方、偽りの生活という、生活、人生が変わってくるものです。福音の言葉を自分の人生の中で受け入れて生きる時に、世にとっては愚かかもしれませんが、それこそが知恵のある生活であります。

2A 適切な、時にかなった言葉

ところで、「知恵のある人」という言葉があります。けれども、それは語弊があります。知恵のある人と聞くと、知恵蔵のような知恵の宝庫を持っている人のように思えるかもしれませんが。知恵というのは、集めて、それを貯めることができないものです。その時に、知恵が欠けているというような状況がある時に、聖霊の油注ぎがあり、そこで知恵の言葉を発する、という類いのものです。その言葉によって、その状況にぴったりあった言葉を語ることができ、多くの人が「これで良かった」と納得します。その時にならないと与えられない言葉なので、私たちは常に聖霊が語っておられるかもしれないという期待を持っているべきです。迫害を受けている時に、「言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。(ルカ 12:12)」とイエス様は言われました。

私たちは、このようなことを聞くと、なにか「今、知恵の言葉が与えられています！」と電気が走ったかのような感触があり、それで言葉を語るように思われるかもしれません。けれども、多くの場合、本人も気づかないぐらいの自然な方法で、超自然的なことが起こります。私たちは、自然に起こることについては自分たちで獲得しよう、教育や学習で得ようと努力しますが、いいえ、自然に起こっているように見えることも、超自然の力が必要であることを知らないといけません。イエス様が、「あなたがたは、わたしを誰だと言いますか。」と問われて、ペテロが、「生ける神の御子キリストです。」と答えた時に、「このことを明らかにしたのは人間ではなく、天にいますわたしの父です。(マタイ 16:17)」と言われたことを思い出してください。ペテロが何か特別な体験をしたのではなく、そのまま答えたのですが、天からの啓示だったのです。

今、世界中に何千ものカルバリーチャペルの教会があります。そこでは、聖書を創世記から黙示録まで、そのまま教えていくという知恵が与えられました。その聖霊の働きに、チャック・スミスが用いられたのですが、彼が特別な啓示を受けて始めたというのではないことを知ることがとても大事です。彼は、それまでは主題説教をしていました。二年間使いまわすことのできる説教を用意して、それで教団内の教会を二年毎に変えていました。ところが、ハンティントン・ビーチという、コストメサの隣町ですが、今やサーフィンのメッカになった所があります。その時は穴場だったそうです。そこでサーフィンをするのが好きでした。ところが二年が経ちました。彼はある時に、ある説教者のヨハネの第一の手紙の注解書を入手しました。そこにアウトラインがあったのです。それで、数えてみると五十いくつかあって、これで一年は引き伸ばせると思ったそうです。それで少しずつヨハネ第一を学び始めたところ、これまでは伝道の努力をしていたのに、これまでよりも礼拝に集う人々の数が倍になったのです。今度は、ローマ人への手紙の講解を始めました。ローマ書は教会を変革できると信じたからです。教会は変革することは特にありませんでしたが、自分自身が神の恵みの福音に出会うことができ、変えられたそうです。そして、ハーレーという人の「聖書ハンドブック」を手に入れました。そこには、「会衆に聖書通読の習慣を付けさせるとよい。説教する箇所を前もって読んでもらって、そこから説教する。」という、聖書全体の講解説教の勧めが書いてあったのです。それが、カルバリーチャペルの始まりです。

私も思えば、ごく自然な動機でした。「一応、録音しておこう」ということで、教えていたものをカセットプレーヤーで録音していました。そして、インターネットの時代に入ります。ホームページを立ち上げて、これを聞いてもらおうと思い、隣に住んでいる人に少しお金を払って、ロゴス・ミニスリーの大枠のデザインを作ってもらいました。そして、聖書の学びに訪問してきた兄弟が、「これを使うといいですよ。」と言って、ICレコーダーをくれたのです。これまでのカセットテープは、ソフトを使ってMP3に変換して掲載していきました。

ところが、これがどんどん大きくなりました。私たちが宣教地に行っている間に、多くの人が問い合わせしていることを一時帰国している時に分かりました。そして今は、「聖書の学び」とグーグル検索すると、一番上にロゴス・ミニスリーが出てきます。そして、たくさんの方が利用しているだけでなく、聖書を読んでいって、魂の救いを経験する人々も出てきました。ですから、私が何かすごい示しを受けて、始めたのでは全くありません。手段など、どうでもよいのです、神はご自分のことばを大切にしておられます。ご自分のことばを、実にご自分の御名同様に大切にしておられます。神がご自分の語られることを、実行しないで空しくすることはないので、ですから、もっぱら神の働き、ミニスリーなのです。ですから、聖霊の働きは時に本人も気づかないほど自然に行われることもあるのです。

3A 聖書の事例

知恵の言葉が語られると、それで神の栄光が現われます。聖書の中で初めに使われた「知恵」は、幕屋の祭具を作る人たちに使われました。「出エジプト 28:3 あなたは、わたしが知恵の霊を満たした、心に知恵のある者たちに告げて、彼らにアロンの装束を作らせなければならない。彼を聖別し、わたしのために祭司の務めをさせるためである。」モーセに示された、装束の作り方を実際に作る人は、知恵の霊に満たされたそれを行いました。そのことで神の栄光が現れました。

そして、人々を治め、導く時にも知恵が与えられます。モーセがヨシュアに手を置きました。すると彼は知恵に満たされました。「申命記 34:9 ヌンの子ヨシュアは、知恵の霊に満たされていた。モーセが彼の上に、かつて、その手を置いたからである。イスラエル人は彼に聞き従い、主がモーセに命じられたとおりに行なった。」それから、異邦人の国の王たちも、知恵の霊に満たされた人にその助言を聞きました。バビロンの国におけるダニエルに、王たちが聞きました。「5:11 あなたの王国には、聖なる神の霊の宿るひとりの人がいます。あなたの父上の時代、彼のうちに、光と理解力と神々の知恵のような知恵のあることがわかりました。ネブカデネザル王、あなたの父上、王は、彼を呪法師、呪文師、カルデヤ人、星占いたちの長とされました。」

そして神のキリストご自身が知恵に満たされた方でした。イザヤがキリストをこのように預言しました。「11:2 その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。」この方は知恵に満ちた方でした。

知恵の言葉が語られる時の特徴的なのは、「平和」であります。「ヤコブ 3:17しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。」私たちの周りでは分裂があり、争いがあります。どうしても解決できない問題があり、双方の意見に一理あり、けれどもそれを一つにすることができません。しかし、聖霊がその時に言葉を与え、すべての人が「その通りだ」と言わせる知恵を与えてください。あるいは、分裂、分派を引き起こそうとしている者を、そのような混乱を起こさずして神が取り除くための言葉が与えられるかもしれません。

箴言を書いたソロモンの名の意味は、「シャローム」つまり「平和」から来たものです。彼は、主に知恵と理解力が与えられるように祈りました。それを主が叶えてくださいました。その一例として、二人の遊女の話が出てきます。赤ん坊がそれぞれいたのですが、夜が明けると一人が死んでいました。それは、自分の赤ん坊ではないと母親が言います。相手の女の抱いている生きている子が自分の子だと言います。摩り替えたのだ、と主張するのです。けれども、その相手の女は「いいえ、これは私の赤ん坊です。」と主張します。他の証人がいないので、この両者の主張以外に召命するものはありません。これでは判断ができません。そこでソロモンが言います。「その生きている子を二つに断ち切って、二人に上げなさい。」そうしたら、一人の女が「そんなことしないでください、その女に生きている子をあげてください。」と言います。もう一人は、「断ち切ってください。」と言います。そこでソロモンが言いました。「初めの女にあげなさい。その女が本当の母親だ。」(1列 3:16-28 参照)全く二つの相反する証言で解決不可能と思われたのに、ソロモンは母性本能によってどちらが本物の母親かを見分けたのでした。

知恵の御霊に満たされていたイエス様も、同じように対応されました。律法学者やパリサイ人が、誘導して、イエス様を罠にはめて窮地に陥れようとしてしました。ひっかけ質問を考えだしたのです。それは、カイザル、ローマ皇帝に税を納めるのは律法にかなったことなのかどうか？ということです。その時、ユダヤ人はローマの圧政で苦しんでおり、その象徴が税金であり、それを憎んでいました。ですからイエス様が、「律法に適っている」と答えれば、ユダヤ人の反感を買うことになります。そして、「律法に合わない」と言うものなら、そのままローマ当局に通報すればローマがイエス様を処理してくれます。どちらで答えても、イエス様は窮地に陥ると考えたのです。ところが、イエス様は、「硬貨がありますか」と言われます。彼らは硬貨を渡しました。「この硬貨にあるのは誰の肖像ですか。」と言われました。「カイザルのです。」と答えました。イエス様は、「そうですか。それならカイザルのものなのだから、カイザルに返しなさい。そして神のものは、神に返しなさい。」と答えられました。絶妙な答えです。これこそ、知恵の言葉です。二つの相容れない選択しかないと思われる所が、本質を見抜き、そして両者をつ一つにする言葉を語るのです。これが知恵の言葉です。

そして、教会において、知恵の言葉が用いられた例を見たいと思います。使徒の働き 6 章です。ギリシヤ語を話すユダヤ人が、使徒たちに不満を述べました。自分たちのやもめが、配給において、ヘブル語を話すユダヤ人よりも、なおがしろにされているということです。ユダヤ人の間で、何

百年前にギリシヤ化が行われ、ギリシヤ語のみを話すユダヤ人と、伝統を守ったヘブル語も話すユダヤ人の二つのはっきりと分かれた文化を持って、過ごしてきました。今、一つになって暮らしていたのですが、配給において差別が起こったということでした。

そこで、十二使徒が教会の人たちを全部集めて、話しました。「6:2-4 私たちが神のことばをあと回しにして、食卓のことに仕えるのはよくありません。そこで、兄弟たち。あなたがたの中から、御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。私たちはその人たちをこの仕事に当たらせることにします。そして、私たちは、もっぱら祈りとみことばの奉仕に励むことにします。」これが、全員の承認するところとなりました。やはり対立するものを、中庸や妥協というものではなく、もっと本質的なところで平和をもたらしたのです。そして、この言葉自体が知恵の言葉でしたが、彼らの選ぶ給仕をする人々もまた、御霊と知恵に満たされた人々でありました。その一人がステパノで、彼は知恵と御霊によって、反対者と議論して神の言葉を語っていました。もう一人がピリポで、サマリヤのリバイバルで用いられた伝道者でありました。

使徒 15 章も、教会の中で対立が起こった例です。アンティオケにいるパウロとバルナバのところに、エルサレムからユダヤ主義者がやって来ました。モーセの割礼を受けなければ、異邦人は救われないとしたのです。それで激しい議論となりました。エルサレムから来たということで、エルサレムで決着を付けることにしたのです。そして、パウロとバルナバが異邦人に神が救いをもたらした神の恵みを報告していると、パリサイ派で信者になった者が異邦人にも割礼を受けさせるべきであると主張しました。それで激しい論争になりました。けれども使徒ペテロが立ち上がり、自分がローマ百人隊長コルネリオに降った聖霊のことをしました。それで、ユダヤ人たちがさえ守れない律法のこと、彼らを悩ませてはいけない、信仰によって神は人を清めてくださるのだと言いました。そして、ヤコブが立ち上がったのです。彼も同じ意見でした。預言者の言葉でも異邦人の救いについて宣べられていることを伝えて、そしてこう言ったのです。「15:19-21 そこで、私の判断では、神に立ち返る異邦人を悩ませてはいけません。ただ、偶像に供えて汚れた物と不品行と絞め殺した物と血とを避けるように書き送るべきだと思います。昔から、町ごとにモーセの律法を宣べる者がいて、それが安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」異邦人であっても、ユダヤ人がこれら三つのものは汚れているということを知っており、彼らがそれを避けることはユダヤ人に対する愛と配慮の行為であることを知っていました。ですから、これらのことを避けるのは重荷にはなりません。だから、両者にとって納得のいく判断だったのです。後で決議として、「聖霊と私たちは、次のぜひ必要な事のほかに、・・」と言って、聖霊による言葉であることを認めました。

4A 今日の知恵の言葉

ですから、知恵の言葉は神の教会に、ぜひなくてはならない大切な聖霊の賜物です。その時にならないと分からない言葉であります。そして、人々の心の深みに入るような言葉で、人々が神をあがめ、平和で守られ、前進することができるようにしてくれます。あまりにも的を射ており、これは知恵の言葉であると認識できるものなのです。ですから私たちは、聖霊を求めて、聖霊の導きに

従えるようにいつも心備えをして、日々を歩めばよいのです。

この知恵の言葉の賜物と、知識の言葉、そして預言は、牧会をする時には欠くことのできない賜物であります。説教の時に、これらの賜物によって語るのも、教会に対する御霊の語りかけがあります。そして、「よくも、こんなことを語っていたのだな。」と後で本人が感心するというか、自分自身が恵まれることがあります。それは自分が語っているからではなく、御霊が語らせておられたからです。見分けの賜物も持ちられますね。啓示として与えられるもの、神から受けて、それで分かち合う賜物であります。

使徒パウロはこう祈りました。「エペソ 1:17 どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。」神を知るための知恵と啓示の御霊です。そして、コロサイにある教会に対してはこう祈りました。「コロサイ 1:9 こういうわけで、私たちはそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。」やはり、霊的な知恵、理解力を持って、神の御心を知るようにと祈っています。そしてコロサイ書では、「このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されているのです。(2:3)」というすばらしい言葉があります。キリストご自身の中にいることが、知恵そのものです。

そしてヤコブは手紙の中で、「1:5 あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。」と話しました。知恵を求めましょう、神が惜しみなく与えてくださると約束されています。